

7(255・294)

高崎市文化財調査報告書第147集

上小埸村東Ⅰ・Ⅱ遺跡

—高崎市上小埸団地建て替え建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書—

1997

高崎市教育委員会

序

高崎市は人、もの、情報、文化の「交流拠点都市高崎」の建設を町づくりの基本として活動しています。

市では、西暦2000年にちょうど市政施行100周年を迎え、それに向かって町づくりを推進しているところであります。目立つところで市中心部に新市庁舎が建設中であり、交通関係では北陸新幹線の工事が建設中であります。計画に基づいた区画整理、都市再開発、道路建設、宅地整備などの整備開発事業は、民間の開発が活発に行われている現在です。しかし、こうした事業推進は貴重な文化遺産の消滅の危機にもなっています。遺跡発掘調査においても慎重に対応していかなければならないと思います。ここに報告します上小堀村東Ⅰ・Ⅱ遺跡は市営上小堀住宅団地の建て替えに伴い発掘調査されたものです。当地の周辺においても多くの遺跡が発掘調査されて貴重な資料を得ています。高崎市の北部は榛名山のおよそ南麓にあたり、一帯は緩やかな傾斜地となっています。上小堀地区全体では水田に囲まれた桑畑の地形にあり、平坦な土地であります。近年の土地改良事業、高崎市北部環状線の開通によって景観は次第に変化してきています。上小堀団地建て替え建設工事に先立ち試掘調査を行ったところ1108年に浅間山より噴出し堆積したテフラであるB軽石層を確認しました。平成8年度は4世紀中頃に噴出したとされる浅間山のテフラ、C軽石土層下の水田面に縄文土器が見つかり、平成9年度の発掘調査では、さらに多くの縄文土器が出土しました。これらは貴重な参考資料となりました。最後になりましたが発掘調査にあたり御協力くださいました地元の皆さま、発掘調査及び整理作業に従事して下さいました皆様方に感謝の意を表しまして序と致します。

平成9年3月

高崎市教育委員会
教育長 砂田 威夫

例言

- 本書は高崎市上小堀団地建て替え建設に伴う平成6年度、8年度埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

(所在地) 高崎市上小堀町825番地
(調査期間)

上小堀村東Ⅰ遺跡 1994年(平成6年)9月30日
～11月4日
上小堀村東Ⅱ遺跡 1996年(平成8年)9月1日
～11月21日

(調査面積)

上小堀村東Ⅰ 合計 977.1㎡
上小堀村東Ⅱ 合計 4192.4㎡

- 発掘調査と整理は高崎市教育委員会が行った。

平成6年度 〈事務局〉 武井洋一 神戸聖蹟
石田悦子 篠原伸枝
〈調査担当〉 川野邦彦 関口 修
神戸 肇

平成8年度 〈事務局〉 神戸聖蹟 村井田雅明
倉澤おる
〈調査担当〉 吉田昌利 神戸 肇

- 本書の執筆、編集は神戸聖蹟が行った。

- 遺物の復元、実測、挿図作成等の諸作業は担当者の指示のもとに小川泉、小嶋明子、岩崎富土世、田村初江(Ⅰ遺跡)、中村キヌエ(Ⅰ遺跡)が行った。

- 写真撮影：遺構写真については担当者、小池孝が行った。他に遺物写真は中村寅が行った。

- 上小堀村東Ⅰ・Ⅱ遺跡の出土遺物、図面等は高崎市教育委員会に保管している。

- 基準点測量は岡グリーン測量設計に委託した。

- 自然科学分析は御古環境研究所に委託した。

- 高崎市教育委員会遺跡番号

上小堀村東Ⅰ遺跡 255
上小堀村東Ⅱ遺跡 294

- 本遺跡の整理、報告書作成にあたり小野和之氏、中村正方氏に御教示いただいた。記して感謝の意を表します。

凡例

- 本書で用いた遺構の略号は下記の意味を表す。

SB 掘立柱建物跡 SD 溝 SK 土堀、ピット

- 土層と土器の色調は「標準土色帖」を参考にした。

- 図版中の北は國家座標第IX系による座標北である。

- 文中のテフラの用語：A、浅間山軽石はAs・Aで浅間山噴出テフラ(天明3年、1783年)。B、浅間BはAs・Bで浅間山噴出テフラ(天仁元年、1108年)。C、浅間Cは4世紀中葉の降下軽石。

- FA、榛名山二ツ岳噴出テフラ(6世紀初頭)。
FA洪水は泥流、洪水堆積物等を含めた言葉として使った。

目次

序

例言

第1章 発掘調査の実施と経過

第1節 1、調査の経緯	2
2、調査の口誌	2
第2節 調査の方法	2

第2章 立地

第1節 遺跡の物理的環境	3
第2節 周辺の遺跡と歴史	3
第3節 基本土層 図1、図2	4
図3、基本土層図	5

第3章 検出した遺構と遺物

第1節 縄文時代 図4	6
8区SK1と遺物 図5	7
1区SK2と遺物 図6、7	8～9
4区と遺物 図8、9、10、11	10～11
溝、土堀 図12、13、14、15	12

第2節 弥生時代

I遺跡水田跡 図16	13
II遺跡水田跡、溝 図17	14

第3節 古墳時代

1、水田跡(地蔵) I遺跡水田跡 図18	15
図19、20、21、22	16～17
II遺跡水田跡 図23	18

第4節 中世～近世

掘立柱建物跡、溝、耕作痕 図24、25 図26、27	19～22
第5節 II遺跡石製品 図28	21、23

第4章 まとめ

第5章 自然科学分析

写真図版 遺構	28～29
遺物	30～33
プラントオパール	34

第1章 発掘調査の実施と経過

第1節 1、調査の経緯

住宅建設は戦後の高度時代から、一応住宅数の不足状況は解消されてきた。公共賃貸住宅も住宅戸数の確保に大きな成果を果してきた。住宅不足が解消された今日では質の時代になってきている。内容も個性的なものへ、さらに周辺の環境を含めて多様な要求が求められている。現在の高崎市の公共賃貸住宅は耐用年数の経過したものや老朽化してきているものもあり早急に建設が必要となっている。しかし近年の地価高騰や用地取得難により新規に住宅建設は困難な状況にある。そのようななかで高崎市は長期的視点に立ち効率的な事業計画の元で建て替え建設事業を実施してきた。その計画の中で建設年次が古い市営上小塚住宅団地の再生を図ることになった。上小塚団地の立地は榛名山の南麓、前橋台地と言われている、やや微高地にある。団地の北西に6世紀代とされる上小塚稲荷山古墳がある。全体には水田が多く、その中に桑畑の土地があり生産と居住環境に適している。古代より人間の営みが継続されてきた可能性を想起させる土地柄である。過去、上小塚町内では発掘調査は行われていないが周囲の状況から遺跡の存在が高いと予想された。高崎市教育委員会では上小塚住宅団地建て替える連絡があった時点で関係課と対応と協議を行った。平成5年度に試掘調査を団地内に行った結果、浅間山噴出のB軽石純層を確認し、さらにその下層の浅間C軽石が認められたので水田遺構の可能性が高いと考えられた。遺跡の保存は手をつけずそのままの自然状態におくのが一番よい訳だが、計画に乗って進んでいる団地建て替え建設の変更は諸般の事情から不可能である。やむをえず調査を行った。発掘調査は2年度まで行われて行った。1年度が平成6年9月30日より発掘調査を開始し、平成6年11月4日に調査を終了した。2年度目は団地建て替え建設事業の残工事分を、平成8年8月1日に試掘調査に入りそのまま発掘調査となった。

2、調査の日誌

上小塚村東Ⅰ遺跡 (平成6年度)	上小塚村東Ⅱ遺跡 (平成8年度)
9月30日 重機による掘削開始。排水開始。	8月1日 試掘調査。
10月5日 FA下の機出開始。ミニ水田、足跡の検出。	8月6日 バックホウによる掘削、じょれんによる遺構確認。雑草の刈刈。
10月13日 作業の継続、B軽石の処理調査。	8月19日 掘立柱跡の確認。
10月14日 FAは二次地盤、石礫土。	8月22日 B軽石層の除去作業。
10月17日 FA水田検出終了。	8月26日 Ⅱ区平面とり、Ⅲ区掘削作業。
10月18日 FATの写真、コンタ、平面図とり。	9月11日 Ⅱ区耕作痕の移植グザによる作業。
10月24日 土壌、断層のレベルとり。	10月11日 Ⅱ区壁切。壁から縄文土器片出土。
10月25日 C下水跡の検出開始。	10月17日 FA洪水土層を重機による掘削。
10月27日 自然科学分析の土壌採取。	10月28日 C下の畔を確認。
11月1日 C下図面とり終了。	11月11日 C下の下層土層の除去作業。
11月2日 C下図面とり。以後整理作業。	11月21日～22日 埋戻し、以後整理作業。

第2節 調査の方法

平成6年度発掘調査をⅠ遺跡とし、平成8年度発掘調査をⅡ遺跡と称した。Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査に先立ち、平成5年、8年に団地建て替え地内を試掘調査した。5年の試掘調査ではB軽石層を下げたところ湧水があった。調査区は最初に重機で表土を剥ぎ、注意深く掘削した後、じょれん、移植グザによる作業を行った。Ⅰ遺跡では一層目を掘削後、湧水に対し排水ポンプを調査終了まで使用した。Ⅱ遺跡では旧団地の排水管理設備の溝を利用した。掘り出した土砂は調査地内に置いた。基準杭は国家標準JIS系内の任意点を選択し、杭打ちを業者に委ねた。平面図は1/20、1/40の縮尺で、エベレーション、セクション図は1/20の縮尺とした。

写真撮影は35mmリバーサルとモノクロームを使用した。

第2章 立地

第1節 道路の地理的環境

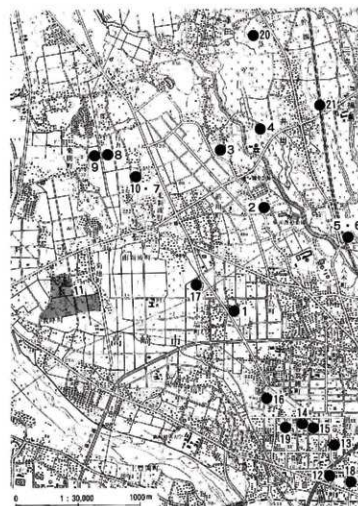
上小塚村東Ⅰ・Ⅱ遺跡調査地は市中心から北北西に約4km、標高110.0～109.8mの位置にあり、高崎市上小塚町825番地に所在する。榛名山南面の現在の地表は2つの扇状地上にある。相馬ヶ原扇状地と白川扇状地である。概してこの2つを相馬ヶ原扇状地と呼んでいる場合が多い。相馬ヶ原扇状地は榛名山火口の東南斜面に形成された火山山麓の扇状地である。扇頂は白川と千王塚川の間の山麓を扇頂とし、扇端は標高110mあたりとされる。榛名山から見る西側の扇頂は白川、井野川のラインである。他方白川扇状地は箕野町を扇頂とし、高崎市北部の前橋台地に接す。前橋台地は火山泥流堆積物の原面に水性堆積物によって覆われている。上小塚はこのよう前橋台地の微高地に立地している。村東は上小塚町の小字である。また小塚の名称は「小鼻」または「小鼻輪」と称された。ハナとは小丘陵の先端部を意味する言葉で、その先端部の輪状になっている部分がハナである。したがってコバナワは小さなハナの意味とされている。農業は養蚕や畑作に依存し、冬季には北西からの季節風が吹きつける。桑が遅霜の害にあうことがしばしばあった。上小塚町には自然河川はないが本調査地の北約1kmに白川より分派する早瀬川が南東に流れ井野川に入る。井野川は南下して高崎市東端で烏川と合流する。白川は本調査地より西に約2.3kmにあって、源は榛名山の松之沢奥地から始り、南下して榛名町より貫流してきた烏川と高崎市の西端で合流する。また烏川から引かれた長野郷が地内を流れている。これらの川は上小塚町の土改改良施策により有効に生かされている。道路においては本調査地より約300m南に高崎市北部環状線（昭和59年全線開通）が走っている。すぐ西側には北に位置する箕野町より下ってくる箕野・榛名線の道路が高崎市北部環状線に結ばれている。

第2節 周辺の道路と歴史

相馬ヶ原扇状地は軽石流、火砕流、泥流や洪水でもたらされた土等により形成されている。これら榛名山南面に発生した多くの河川は、また多くの人々の生活の跡を大地に残している。上小塚村東Ⅰ・Ⅱ遺跡に関する周辺の遺跡には本遺跡東北約1kmの芦田貝戸遺跡は井野川右岸にある。水田遺構として芦田貝戸Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ遺跡は浅間C、B下、榛名FA下があり、榛名FP下水田はⅢ遺跡に検出された。芦田貝戸遺跡の北にある御布呂遺跡はC、FA下で、昭和54年調査ではFP下水田が検出された。さらに井野川右岸を上流すると道場遺跡群があり、B下水田、平安時代の住居跡、FAに被覆された古墳と中世館址を検出している。浜川北遺跡ではB下水田跡、道場遺跡群内にある高田屋敷遺跡ではC下、FA下、B下水田跡を、対岸の東の道場遺跡は弥生、平安時代の水田跡、中世の掘立柱建物跡を検出している。川野川によって東側には熊野堂遺跡はC下、FA下水田跡、大木熊野堂Ⅰ遺跡は弥生後期、古墳時代の住居跡を検出している。本調査地の北から北西方面には江原（Ⅰ）、中屋敷（Ⅱ）遺跡がありB下水田。その西方の室町町に中屋敷（Ⅰ）、舞台（Ⅲ）遺跡はB下水田と平安時代の住居跡を、菊地遺跡はⅠからⅥ遺跡まで含めて、その地域を菊地遺跡群と呼んでいる。いずれもB下水田を有し、平安時代末の住居跡が菊地遺跡Ⅰから見つかっている。本遺跡調査地南では上並根遺跡群はB下、FA下水田。上並根下松遺跡はC下、FA下、B下水田跡。上並根御所遺跡、上並根北遺跡、上並根北Ⅱ、Ⅲ遺跡ではC下、B下、FA下水田が検出されている。

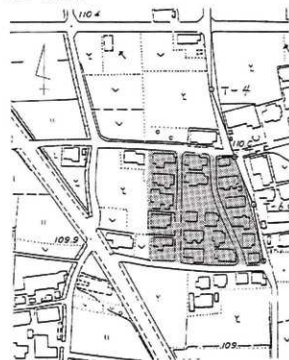
古墳については、本遺跡の西北約0.5kmの場所に横式石室をもつ円墳で古墳時代後期とされる上小塚稲荷山古墳がある。南には筑前遺跡群の中にある小屋山古墳があり、調査では7世紀とされる。上並根稲山古墳はその南にあって5世紀後半とされる。北に3km内に保田古墳群がある。その近くに古墳時代の豪族館跡知られる三ツ寺Ⅰ遺跡がある。上小塚町は中世末には箕輪領に属していた。先に述べた長野郷は西上州一帯に勢力を持った長野氏によって16世紀初め頃に開創された瀬瀬用水とされている。江戸期には上塚村と呼ばれ高崎藩領に属していた。年貢減免運動（五万石騒動）では中心村落の一つとなった。昭和26年、群馬郡の六郷村の大字から高崎と合併して上小塚町となった。町内にある馬子稲荷神社は延暦2年（783年）山城国の伏見稻荷から勧請したものと伝えられ、上小塚稲荷山古墳の墳頂に祀られている。調査地西の大森院は元亀2年に真言宗の寺院として創建されたが時宗を迎え開山し青洲庵に転宗して今日に至っている。

図1 周辺の道路地図



1. 小堀村東Ⅰ・Ⅱ遺跡(本遺跡)
2. 芦田貝戸遺跡(芦田貝戸Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)
3. 御布屋遺跡
4. 高田屋敷遺跡
5. 熊野堂遺跡
6. 大八木熊野堂Ⅱ遺跡
7. 江原(Ⅰ)遺跡
8. 中屋敷(Ⅱ)遺跡
9. 中屋敷(Ⅰ)遺跡
10. 舞台(Ⅲ)遺跡
11. 菊地遺跡群(菊地遺跡Ⅰ～Ⅵ)
12. 上並榎沖道遺跡
13. 上並榎下松遺跡
14. 上並榎御所遺跡
15. 並榎北遺跡
16. 並榎北Ⅱ、Ⅲ遺跡
17. 小堀稲荷山古墳
18. 小堀山古墳
19. 上並榎稲荷山古墳
20. 保蔵田古墳群
21. ツツ寺Ⅰ遺跡

図2 調査地図



第3節 基本土層

右図は上小堀村東Ⅰ・Ⅱ遺跡の基本土層図である。Ⅰ層はⅠ～Ⅰ層を含む。両方とも浅間A、Bが混るがⅠ～Ⅰ層が比較的Aが多く、また固く締っている。Ⅱ層もA、B混り。この層も固く締る。Ⅱ遺跡では酸化鉄が多い。夏期でのⅡ遺跡のⅡ層除去作業はきついものがあった。Ⅰ層Ⅱ層では中世から近代の土器、磁器片が出土している。Ⅲ層は従来の高崎市の平安時代の水田跡の多くが検出されるところだが、本調査区内では極く一部分に土層が認められるが面としては確認できない。したがって平成6年のⅠ遺跡、平成8年のⅡ遺跡ともに水田調査にはなっていない。Ⅳ層は調査区において層厚が少ない所や無い場所もある。Ⅴ層は浅間C軽石が混った粘質土で上層のC軽石層を除いて水田跡を検出した。C軽石6～8mm大を含む、比較的粒が大きい軽石層。Ⅵ層の最下層はシルト質で概ね2層に分かれる。

- Ⅰ層 7.5YR3/4 暗褐色～4/2 灰褐色土。A、Bはほぼ均一に混る。上層部分はずかにAが多い。
 Ⅱ層 7.5YR4/4～4/3 褐色土。B、A軽石混るがBの方がより多い。B軽石主体。
 Ⅲ層 7.5YR3/2～3/4 黒褐色～暗褐色土。B下の水田は此の層。自然科学分析ではイネを検出。
 Ⅳ層 7.5YR3/4～4/3 暗褐色～褐色土。FA洪水土層。Cが混る。固く締る。
 Ⅴ層 7.5YR4/2 灰褐色土。Cが多く混るFA洪水土層。粒を検出。科学分析ではイネ検出せず。
 Ⅵ層 7.5YR2/1 黒色土。C混り粘質土。上部分はCを多く含む。下部は粘質土。畦を確認。
 Ⅶ層 7.5YR3/1～3/2 黒褐色土。シルト質。H点ではわずかに粘り持つ。Ⅰ～N点に筋状の砂層。
 Ⅷ層 7.5YR3/3 暗褐色土。Bを多量に含む酸化した層。
 Ⅸ層 7.5YR3/2～2/1 極暗褐色～黒色土。シルト質。わずかに砂が入る。縄文土層出土層。

Ⅰ 基本土層図

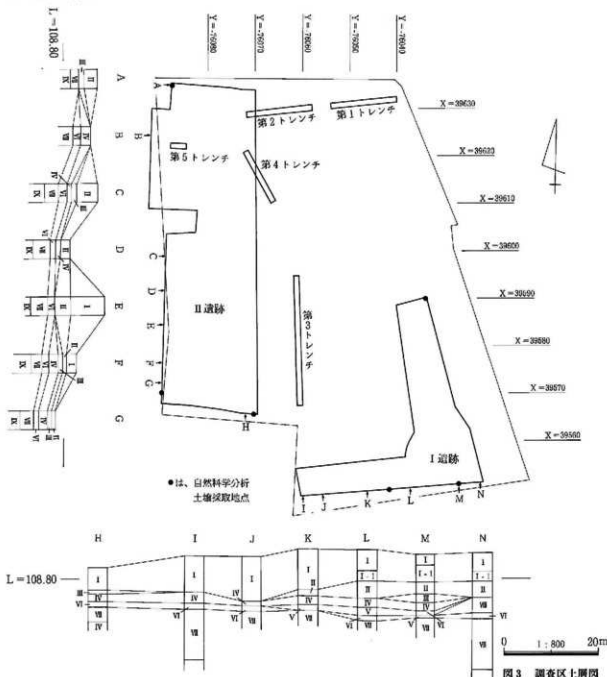


図3 調査区土層図

第三章 検出した遺構と遺物

第1節 縄文時代

今回はⅡ遺跡で調査した。Ⅱ遺跡では都合により、1区画から8区画に分けた小区面のトレンチ発掘調査を行った。遺物としての土器は全調査区から出土している。他に打製石斧、磨石、砥石等が出土した。遺構として溝2条、土塀1基を検出した。遺物出土はⅡ層のシルト土層から出土した。Ⅱ遺跡ではⅡ層下はローム層の漸移層である。本調査区の北側と南側ではローム漸移土層の露出が北側で浅い、したがって上層にあるⅡ層ともに地形に添って南側に傾斜していると考えられる。

1区：調査区北寄りの西側で約40.8㎡調査した。Ⅱ層より縄文土器片が出土。ローム漸移土層を掘り込んだ大小の土塀が検出したが遺構としては認められなかった。

8区SK1：8区45.8㎡の調査区内にあるSK1である。8区北壁に接する排水路を造っていたときに土器が比較的多く出土した。掘り方の南北エレベーション図で北側部分から下るころは溝の掘り込みにも重なる部分と考えられる。土器は鉢の胴部分が多い。肉厚は比較的薄く、焼成は良好である。縄文を施文後4本のタテ沈線を引き（図9、13）。縄文施文後磨消し、沈線で区画（図12、14）。図14は沈線区画内の磨き部分に朱を塗している。図2は肉厚の無文口縁。無文口縁に沈線を廻し胴部RT斜縄文を施文（図14）、胴部斜縄文（図3、6）、胴下部で縄文と無文を沈線で分け無文部をへら磨きしたもの（図16、17）。口縁区画で胴部無文と指縁で引き止めた施文（図15）。以上のような土器等の特徴からSK1出土の土器は加曾利E式が考えられる。SK2：1区を拡張した場所にある。ローム漸移土層と黒褐色シルト土層内から出土。土器は集中的にまとまっているが土層は人為的な感じではなく、遺構としなかった。出土遺物である土器の標高は108.24mから108.62mの範囲で出土している。ここでも土器は口縁から胴部分が多い。

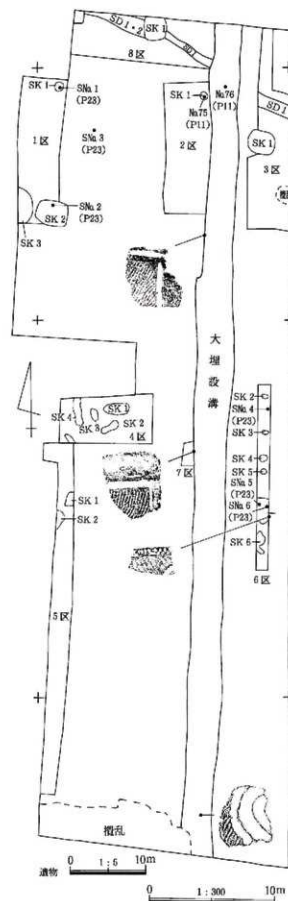


図4 縄文遺跡全体図

8区SK1と遺物

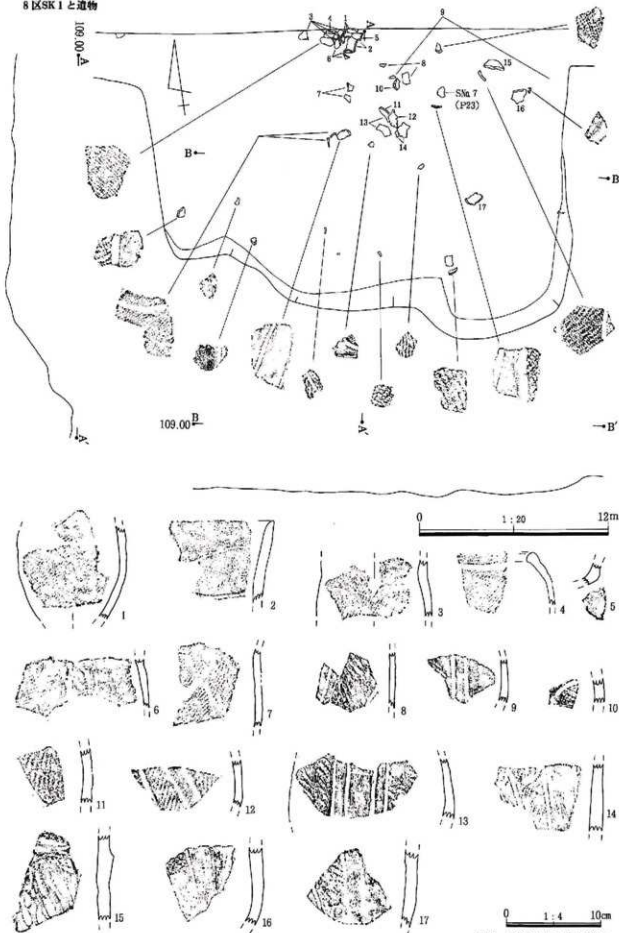


図5 8区SK1と出土遺物

1区SK 2と遺物

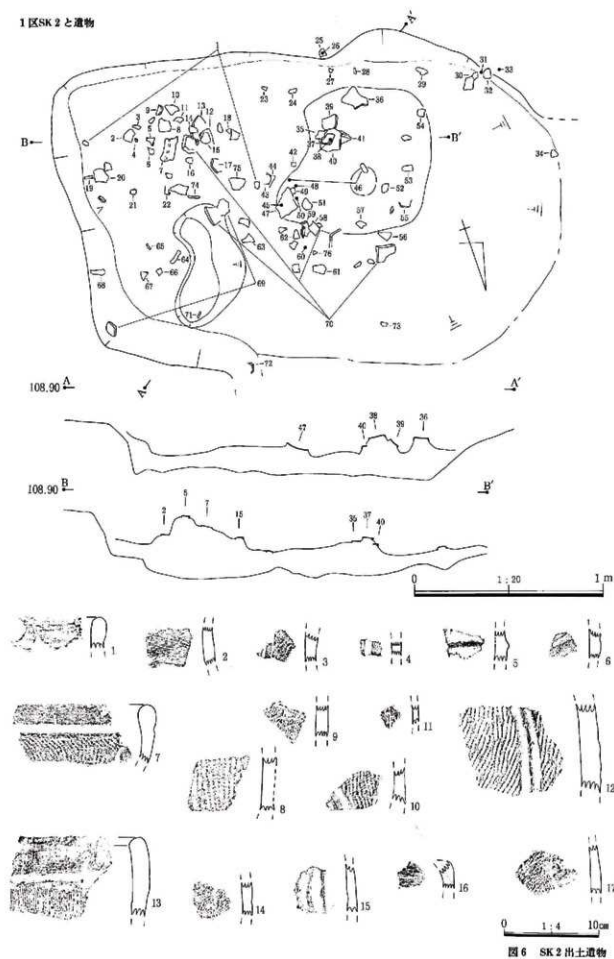


図6 SK 2出土遺物

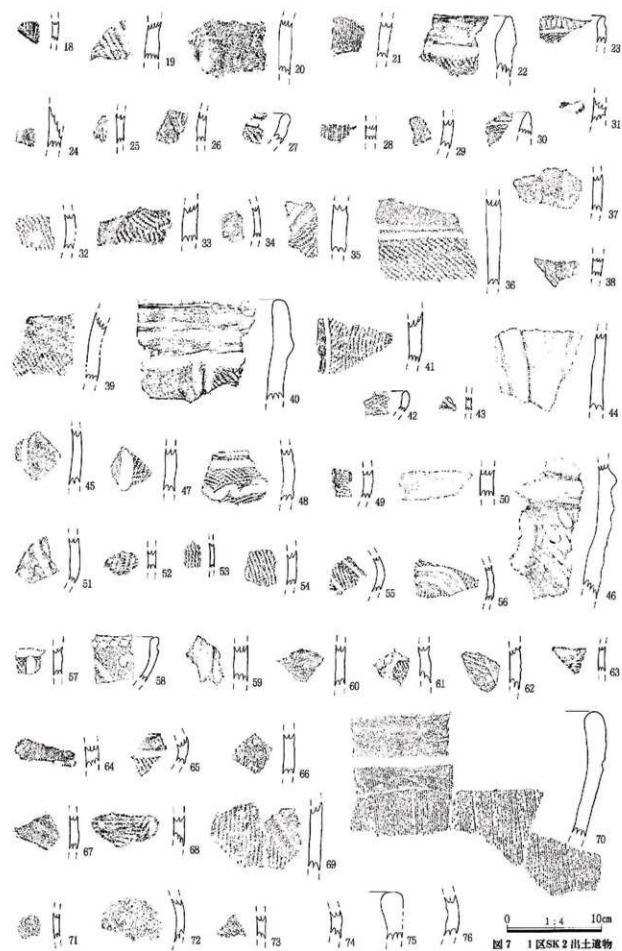


図7 1区SK 2出土遺物

4区と遺物

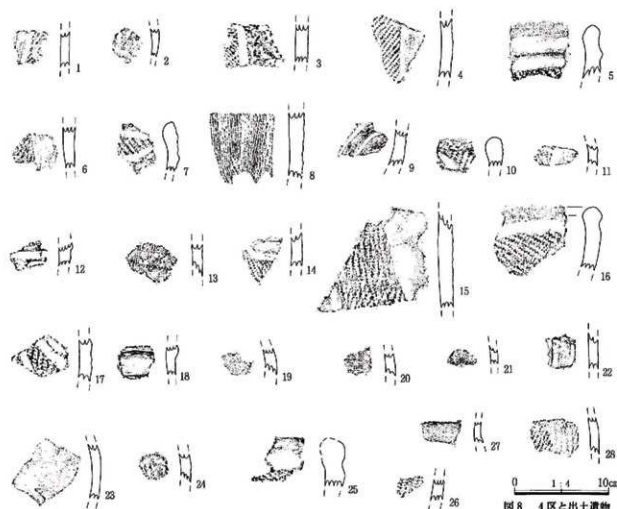
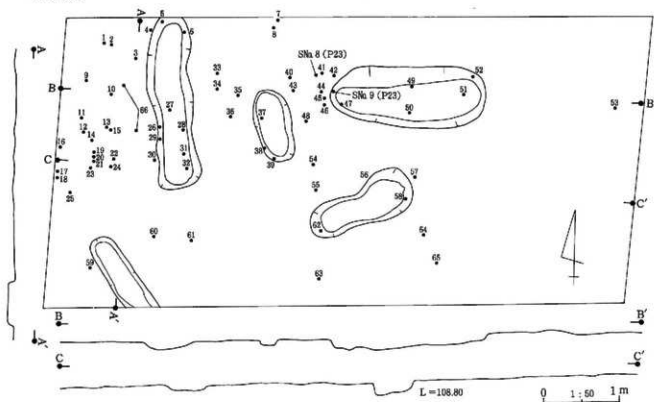
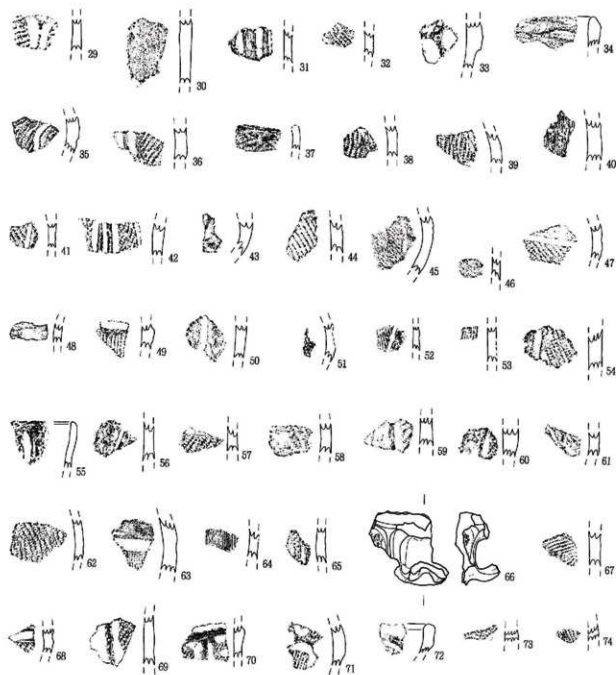


図8 4区と出土遺物



67~74 産土出土

図9 4区出土遺物

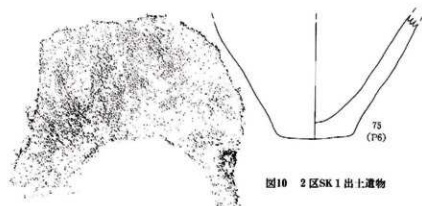
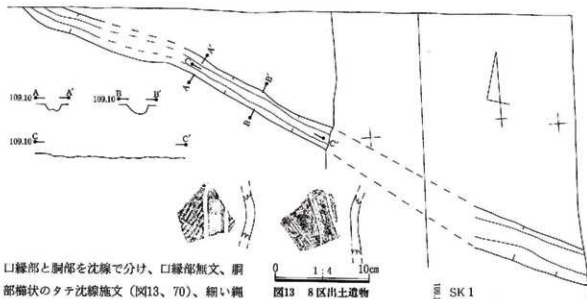


図10 2区SK1出土遺物



図11 大塚段溝出土遺物

0 1:4 10cm



口縁部と胴部を沈線で分け、口縁部無文、胴部無文のタテ沈線施文（図13、70）、細い無文を施すもの（図7、22）。無文でヘラナデ調整した口縁部隆起帯に続く隆起文に面された磨消部分とRL無文（図40）、口縁部が隆起文区画となつながら胴部に指腹を作った施文（図46）、口縁部と胴部を沈線で分けるもの、胴部平行沈線で区画し無文を施文するもの（図55、56）、胴部隆起文で分け無文施文（図21）、胴部数条の隆起文を垂下、隆起文内をへら磨き（図15、44）等々。土器の特徴から加曾利EⅢ式が考えられる。

2区：38.4㎡を調査した。SK1には底部無文の鉢の加曾利EⅢ式土器底部が標高108.68mで出土。4区：29.4㎡を調査。深さ10～16cmの土層6ヶ所検出したが遺構としては認められない。土器出土の土層は下層にわずかに砂を含むシルト質である。土器は口縁部無文で胴部を沈線で分け、口縁部を沈線で楕円区画、その中にRL無文を施文（図5、7、16、17、25）。口縁部無文でやや太めの沈線を廻し、胴部を分け、胴部を櫛状の縦沈線を引く（図63）、胴部RL施文後磨消、磨き後に3本の平行沈線を垂下（図42）。口縁部隆起帯に達がり垂下する隆起文に合った沈線区画、区画内にRL無文施文、先端の丸い器具で引いたもの（図70）。胴部は無文（図23）、良く磨かれた無文（図40、53）。図37の口縁は刺突。図66は口縁部で把手付、隆起文で区画され、区画内は無文と磨消部分である。

5区：南北に長い約41.8㎡の調査区である。北と南の比高は12.6cmが高い。検出した大小の土塊は4区同様、遺構として認められない。6区、7区は14.8㎡、1.6㎡の調査を行った。土城については、やはり遺構として認められないものだった。出土した土器は特徴からして加曾利EⅢ式が考えられる。溝は調査区最北で2本、上下の土層で検出した。上面をSD1、下面をSD2とした。SD1の上端43～56cm、下端20～25cm、深さ20cm。

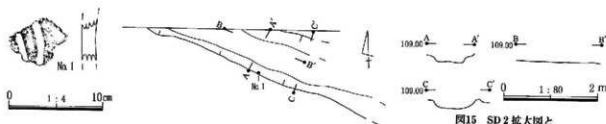


図14 SD2出土遺物

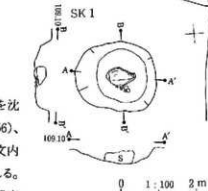


図12 SD1・3区SK1の拡大図とエレベーション図

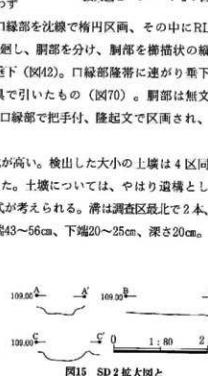


図15 SD2拡大図とエレベーション図

SD2の上端125cm、下端35cm、深さ25cmである。SD1の掘り方はカマボコ形のしっかりしたものである（写真11）。SD2の掘り方は逆さの台形である。SD2底の標高は108.67mから約0.8cmの差をもって東南に流れる。SD1底の標高は108.85mで21cm差でSD2と同じ方向に流れる。2条とも黒褐色シルト土層を覆土している。2条の溝の下にローン層を掘り込んだ溝を確認したが都合により検出まで出来なかった。出土した土器は平行沈線で区画され区画内を無文充填と沈線内をへら磨きのものと、2本の沈線内列点を打ったものである。称名寺式土器と考えられる。土塊は標高108.5mで底に大小12個の石を敷き、その上を80×50cm、高さ35cmのやや平圓形の大きい石を置いたものである。

第2節 弥生時代

I 連続水田跡

基本土層はVI層で上部は多量の浅間C軽石を含んだ上層で上部軽石層を除去し畦畔を検出した。調査面積は488.55㎡のL形をしている。地形は北の等高線108.7m、西側108.41～108.44m。南が33～35cm、東は約1cm低い東南傾斜の地形をしている。等高線で108.55mより北は水田が検出されなかった。表面を被う泥は失われていて、何の痕跡も見られない。全体図の中程下、等高線108.50mから108.45mの間の水田面のないとは違う状態が考えられる。調査区中程で水田が検出されない場所凸凹の痕が全体にあるが、凹みが波立ち、洗われ、くずれたようであり人為的なものやあるいは人の足跡であるかは決められない。水害の可能性が高い。水田面の標高は108.55mの北から始まり南側の108.46m～108.31mのレベル内にある。北と南の水田面の比高差は24cmになっている。畦の高さは1～2cm程度でしかなく、見た目ではほぼ平に近い状態である。畦幅は、一番狭い壁で6cm、広い畦で11.5cmである。従来高崎市で検出された水田の畦を較べると、かなり狭い。原因として畦の高さが低いことである。直接原因は水害が考

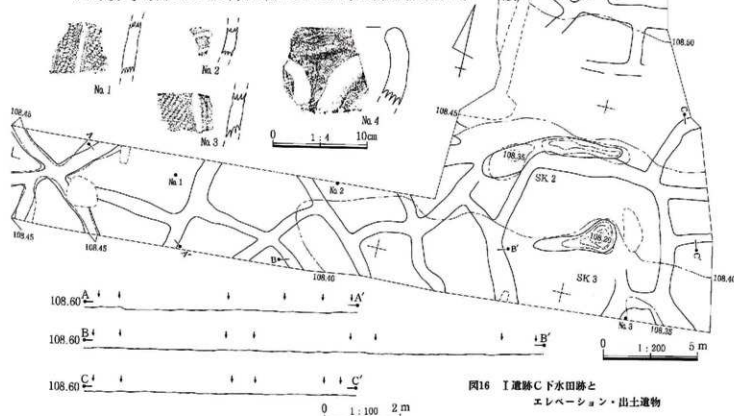


図16 I連続C下水田跡とエレベーション・出土遺物

えられる。畦の下端線は流れ上端も同時に激しい水流に削られ、洗われ水田面の泥と共に失われて畑身になった畦が残った。

水田の形は規格性のない方形をしている。特に西側の人手状の畦に関わる水田は地形変化につながる場所にも考えられる。この調査区で目立つのが比較的大きい、底部のなだらかな窪みである。SK 1は260×240cm、深さ8cm。SK 2は760×144×64cm、深さ7cm。SK 3は440×180×72cm、深さ17cmである。水田面にゆるい凹凸はあるものの人の足跡としては決められない。出土した土器は全部縄文で特徴から加賀利E式Ⅲが考えられる。出土位置から人手状水田を含めた地形変化が考えられる。

II 遺跡水田跡、溝

水田の検出土層はI遺跡と同じVI層で上層にC軽石を含む土層である。南北の比高は北108.90m、南108.69mで21cm南傾斜している。東西の比高差は3区北側16cmを除き、1～11cm範囲で東傾斜している。したがって全体的に南東方向に傾斜している。

畦は南の1区で4条、北側2区で4条を検出した。畦の上端、下端、高さは1号48、122、0cm。2号46～86、6cm。3号56、86、4cm。4号44、74、4cm。8号22、47、1cm。10号30、53、2cm。11号24、53、1cm。水田面は平でやや固い。1区2区に凸凹した浅い窪みがある。溝は7本検出した。覆土にはFA洪水土層で埋まっている。調査区の土層が激しく削られ洗われているので溝は水田の年代より新しいものと考えられる。溝の標高は108.66～108.78m、上幅31～50cm、深さ10～13cmで掘り方断面は半円形。北と西が高く、落差は0～3cmとゆるい。

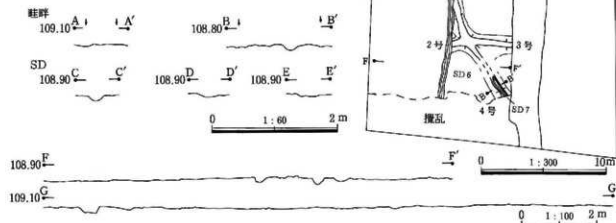


図17 II遺跡C下水田跡とエレベーション図

第3節 古墳時代

水田跡（地層）

標名山二ツ岳を給源とする火山灰層を成分とした洪水土層を目標とするものである。FA洪水土層の厚さは一律ではないが、おおむね10cm前後で調査区を覆っている。I遺跡とII遺跡の土質はI遺跡のやや粘り、柔らかいのに対しII遺跡は固く締っている。FA洪水土層の下部は、I、II遺跡とも浅間C軽石が少し混る。流水の影響を強く受けている。特にII遺跡は従来の水田面になる黒色粘質土の土層が流失している。

I 遺跡水田跡

調査区面積は488.55㎡である。L形調査区は110枚の小区画水田を検出した。水田は等高線108.75mから108.42mの範囲にある。

それぞれの水田の畦畔が多少曲がっているが水田は南北に、あるいは東西に並んでいる。完全に面積を算出した水田は54枚で1.1㎡から2.5㎡の水田が多い（図20）。水田面の表土はかなり失っているが人の足跡はSD 2に接する南北あたりを除けば、調査区全体に残している。完全に計測できる人の足跡を計ると、長さ22～25cm、幅の広い部分は全部10cm、深さは水田面より2～5cmで平均すると3.6cmである。この数値だけからすると同一人かもしれない。

（畦畔）畦は削られて高低差をなくしているが、わずかに痕跡を確認する。調査区北側に於て東西に向う畦畔は30～68cmで平均、41.4cm幅。南北に向う畦畔は21～60cm、平均すると41.5cm幅である。調査区南側の長方形部分の畦、南北に向う畦畔は20～48cm、平均すると30.5cmである。畦の高さは畦と水田面との差を測った。調査区内の108.60mのコンタ線を中心に北と南に分けた畦の高さの測定値は、北側で東西に向う畦は-0.5～-7.2cm、南北に向う畦は-3.3～



図18 I遺跡FA、C水田跡と出土遺物

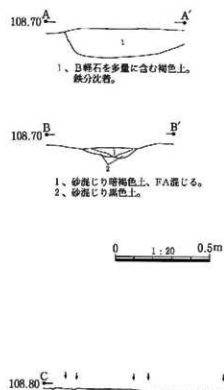
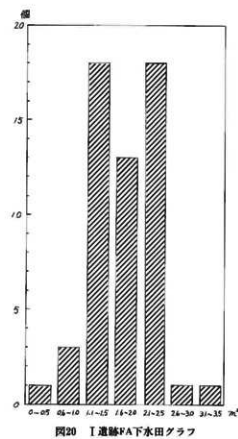


図19 I 道跡PA下水位断面・エレベーション図

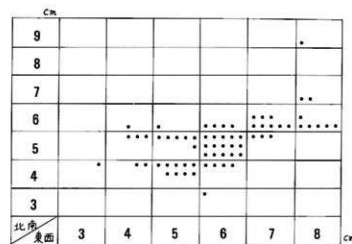
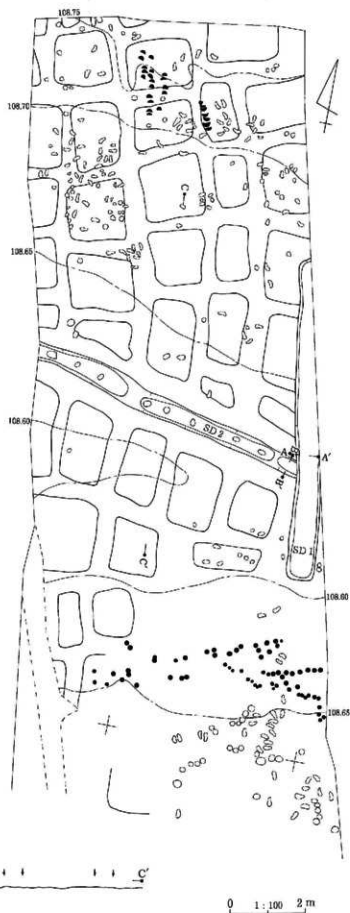


図21 動物足跡グラフ

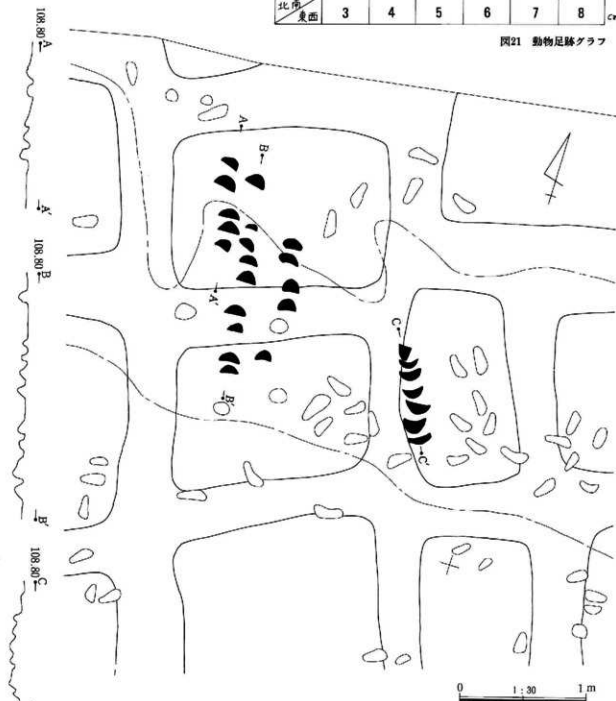


図22 耕作痕跡大図とエレベーション図

4.9cm、南北に向う畦の高さは-0.4~5.0cmである。

(溝・SD) コンタ線108.60~108.65mの間にある溝2本検出した。SD1は火山の一時堆積物の浅間B軽石の処理溝で、上幅28cm、深さ1.5cmである。SD2は東南に傾く上幅28cm、深さ10cmである。SD1はSD2より後世のものである。水田の水口は検出していないがSD2は南面にある取水溝となったと考えられる。溝のなだらかな凹みから強い水流ではないことが想像される。

(耕作痕) 調査区北に4列検出した。耕作痕の形状から3本は北から耕し、東側の1本は逆の南から耕したと考えられる。刃痕の地面の深度とその角度の平均値(図22)は、A A' 14.2cmの深さで32度。B B' は5.2cmで63.7度。C C' は8cmの深さ、38.3度の角度である。耕作痕の用具としては鋤が考えられる。

(動物の足跡) コンタ線108.60~108.65の間に動物の足跡を検出した。測定できた数は33個である。前後の足跡を無視して足跡のサイズを測ってみると5~7cmに集中している(図19、21)。他の報告書資料を参考にする小型馬が考えられる。出土した土器は1、2は縄文、3は須恵器、石鏝で流れ込みと考えられる。

II 遺跡水田跡

激しく表土を削られた水田跡である。完全な水田跡は検出されない。後世の擾乱や破壊箇所も多い。FA洪水土層も厚い所、薄い所、無い所と変化している。コンタ線109.12mより北はFA洪水土層はない。それより南においても土層が薄くなり、無くなって、調査区中程より南に現れ、また消え、出てくる線状を示している。検出された畦は17条、南北に向う畦は座標北から西へ75~82度、東西軸より4~28度東になっている。水田面に対する畦の高さは-22~8cmで平均3.2cmである。水口は2箇所検出された。畦は、全面に広がりそうだが水田面が荒れ過ぎて追求できなかった。

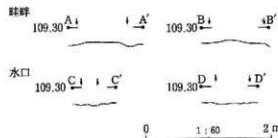
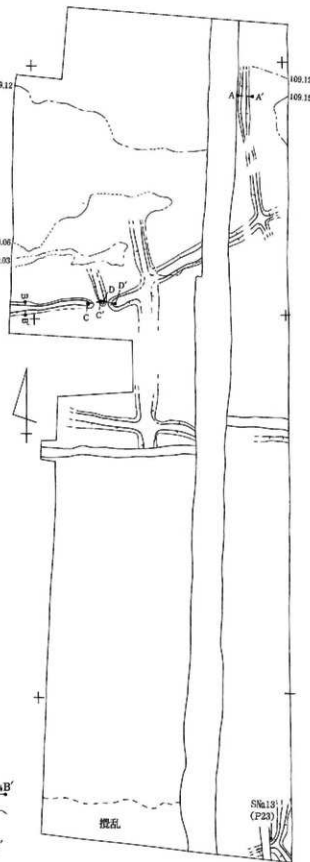


図23 II遺跡FA水田跡とエレベーション図



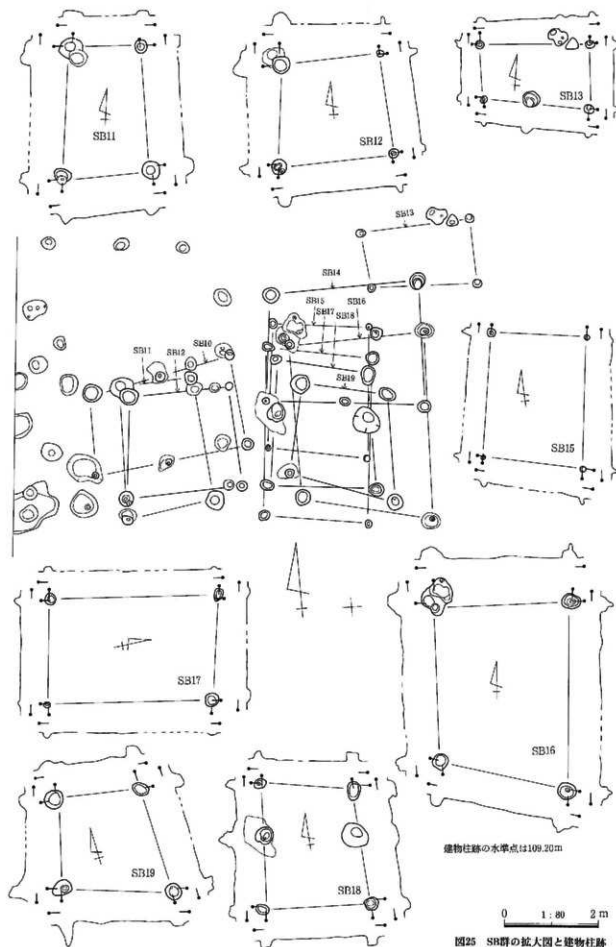


図25 SR群の拡大図と建物柱跡

は2.9m×1.8m。SB11は1.5m×2.7m。SB12は2.1m×2.0m。SB13は2.4m×1.18m。SB14は3.1m×2.2m。SB15は2.1m×2.6m。SB16は3.0m×3.3m。SB17は2.2m×3.5m。SB18は1.9m×2.7m。SB19は1.9m×1.8mである。掘立柱となるピットの中は掘込だけで石等は無かった。石の入ったピットもあるが明らかに現代や現代に近いものである。掘立柱建物の座標北に対する傾きはSB2は0度、SB3は93度東、SB6は95度東、SB7は96度東である。ほぼ南北に面している。SB10～19までは85度から120度東で東南に面している。SB1からSB19までのピットの幅と検出面からの深さは10～55cm幅、7cmから24cmである。掘立柱のピットの幅と深さがあまりにも小さい数値は流水による表土や土層を削除した為と考えられる。

(溝) SD1、2、3の3本検出した。SD1は東西の長さ4m、幅24～50cm、深さ10cm。SD2は東南長19.2m、幅18～60cm、深さ2～25cmで東南に向って浅くなっている。SD3は約20m、幅44～140cm、深さ44～60cmである。各溝とも浅間Bが混る覆土である。

(耕作痕) 西区、南区に近世の耕作痕を検出した。覆土は浅間Bの再堆積上の混りである。酸化鉄の茶褐色した固く締った土層している。西区で11条。南区ではかなり後世の擾乱を受け表面に凸凹が全面にある。両側の耕作痕の境がハッキリしないものもある。確認したものについて13条である。実際はもう少し数が増加するものと考えられる。南区の耕作痕AからKまでの刃痕の数とその平均の深さはAで4個、6cm。Bは6個、6cm。Cは12個、4.8cm。Dは5個、1.3cm。Eは7個、1.3cm。Fは7個、4cm。Gは5個、3cm。Hは7個、3.4cm。Iは8個、2.4cm。Jは5個、5cm。Kは12個、5.6cmである。刃痕の穴の角度はA70度、B60～76度、C60～76度、D65度、G60度、I70～77度、K65度である。

第5節 Ⅱ遺跡石製品

縄文土層から出土した石は№1、2、4、6、16である。№1は輝石、角閃石が入った安山岩の自然石。№2も自然石の安山岩。№4は輝石安山岩の磨石、片面に使用痕の凹みがある。

№6は輝石安山岩の磨石、両面に使用痕の凹み

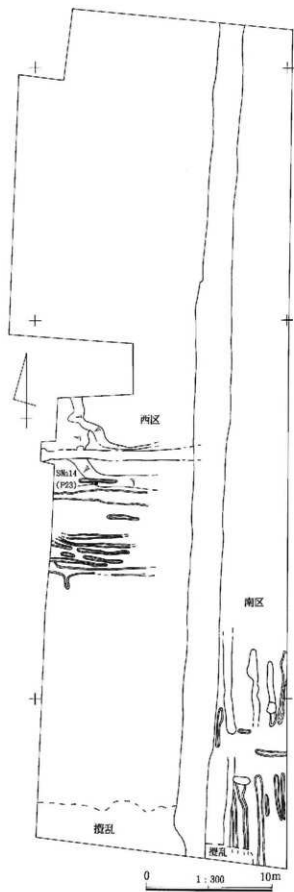


図26 耕作痕全体図

南区跡作痕拡大図

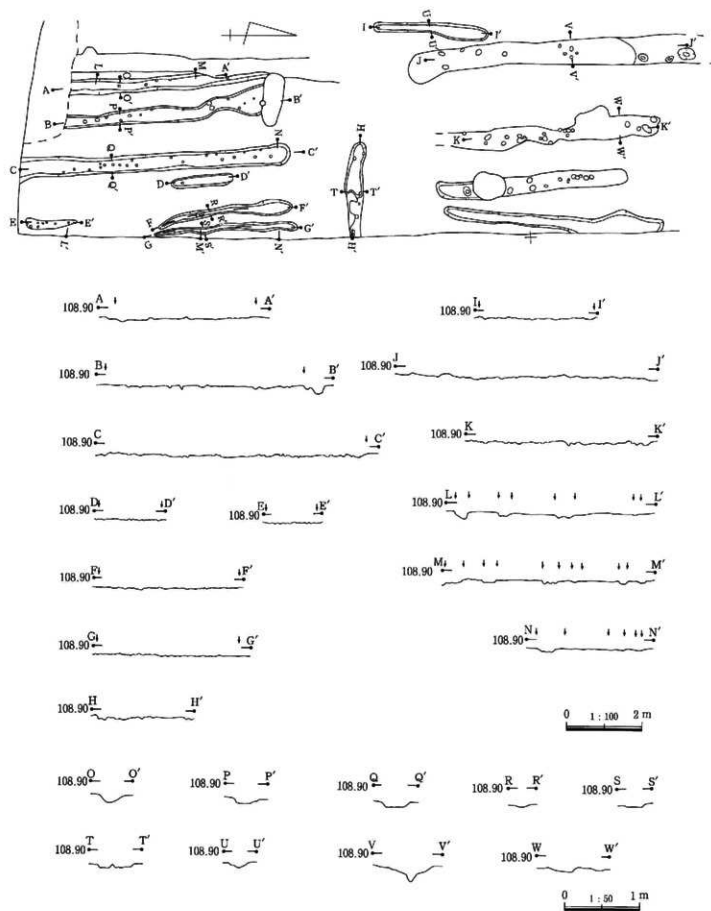


図27 南区跡作痕とエレベーション図

第5節 II 遺跡石製品

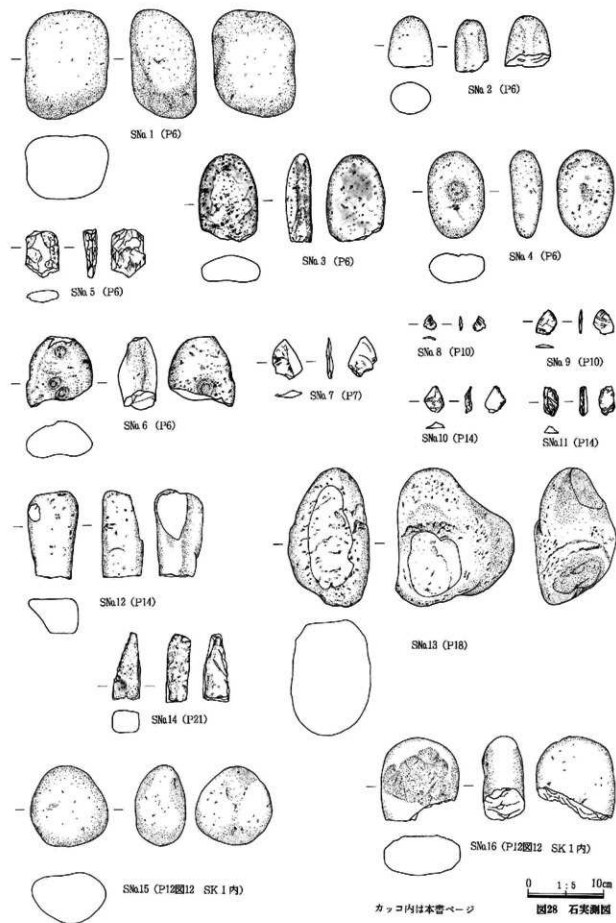


図28 石実測図

がある。Na16は土壌の大きい石の敷石になっていたもので角閃石が入った安山岩の磨石である。Na3は風化した安山岩の磨石。Na5は短冊形の打製石斧、緑泥片岩で刃部、基部ともに欠損する。Na7は凝灰岩質砂岩で剥片石層。Na8、9は縄文土層より出土の剥片石層、凝灰岩質砂岩でできている。Na10剥片石層で泥岩、浅間C下の弥生土層で出土。Na11は黒曜石の剥片石層、弥生土層より出土。Na12は3面に使用痕を残す砥石で輝石と角閃石の入った安山岩。Na13は下A層より下層から出土した輝石安山岩で3ヶ所平になった使用痕がある。砥石が考えられる。Na14は風化した火山岩で使い込んだ砥石である。B下土層の下層より出土。Na15、16は縄文SK1の敷石に用いたものでNa15は輝石、角閃石が入った安山岩で自然石。Na16は磨石に使用したと考えられる。その他に中世〜近世層のSD1の覆土に黒曜石の石鏃が出土している。

第IV章 まとめ

上小幡村東地区は隣接地区を含め豪雨による自然災害を幾度となく被ってきた。特に榛名白川と流町村はひどかった。白川の流路を変える改修工事（昭和32年）や土地面画修整等の努力によって洪水の不安は解消された。地下においても扇状地形の特長と特種な地形の様子が発掘調査によって知ることが出来た。過去をさかのぼってみると縄文中期後半から縄文後期初頭が比較的自然災害もかなり平穏だったのを除き、縄文中期以前も洪水の影響を受けたと思われる土層である。古墳時代以降現代まで頻度も自然災害を、特に豪雨による洪水を経験した。その度ごとに黒色土層は流出した。

〔土層〕 縄文中期後半の代表である加賀利B式Ⅲの土層片が多数出土した。称名寺式土層の出土は1点だがまだ他に出土する可能性がある。I遺跡でやはり1点だが棒式土層片が見つかった。B経石層下で土師、須恵器片が出土している。

〔水田〕 自然災害を強く受けた地形で、特に洪水である。近年まで洪水の記憶を持っている人は多い。C下水田、FA下水田の畦は検出したがイネの検出がなかった。B下についてはイネが検出されても水田遺跡は検出されていない。荒々しい流水は上小幡調査区の黒色土も流失させた。

注1. 箕郷村誌（箕郷村発行）。行力奉名社遺跡（群馬県歴史文化財調査事業団）

注2. 上小幡の民俗 高崎市民俗調査報告書 第2集 平成7年3月発行 参照

注3. 高崎の散歩道 社団法人 高崎観光協会 昭和56年1月発行 参照

明治2年10月から明治4年にかけて高崎藩の領内に発生した民衆一揆を五方騒動という。45ヶ村が参加した。農民・代役者の1人である小島文次郎は上小幡村の者である。連綿した、高崎江木の無類堂で新吾宛宛りした。

注4. 戸田戸田戸田遺跡Ⅱ 第134集 高崎市教育委員会 参照

注5. 高崎市鎌倉考古資料館 第7回企画展 馬具 古墳時代に馬がいた 参照

注6. 矢中村西I遺跡 第44集 高崎市調査報告書

高崎戸田戸田遺跡Ⅱの報告書によると、馬路を計測した16箇所は前後幅は61〜85cmで91〜95cmが多い。後縁は61〜131cmで85〜92cmが多い。子馬とみられる後縁幅は60cm、70cmが確認された。日本在来馬馬で中型か小型馬としている。矢中村西I遺跡では人の子馬の馬路が検出されている。5〜6cmの大きさの足跡は小型馬としている。

注7. 最近、群馬・原の扇状地以外、高崎台地上で高崎市内平地でも加賀利B式土層や住居が見つかっている。高崎村前Ⅱ遺跡 高崎市文化財報告書 第135集 1995
平成6年度調査分の中下層各里遺跡（報告書はまだ出版されていないが、担当者の了解を得て）では住居と土層が検出されている。

第V章 自然科学分析

株式会社 吉澤研究所

1. 上小幡村東遺跡の地質

1. はじめに

高崎市北部に位置する上小幡村東遺跡の発掘調査では、2層から土層の記載が検出された。そこで地質調査によって遺跡の土層の記載を行うとともにテララ検出分析を行って、すでに検出年代が明らかになっている示標テララを検出して土層の堆積年代について記載することになった。そして、これらの示標テララとの年代関係から、水田遺跡の年代に関する資料を収集することを試みた。地質調査の対象とした地点は、B地点、E地点、J地点の3地点である。

2. 土層の分布

(1) B地点

ここでは、下位より砂混じり黒色土（層厚23cm、8層）、黄灰色粘土に富む黒色土（層厚9cm、靱石の最大径11mm、7層）、黄灰色粘土を含む灰色砂質土（層厚6cm、6層）、白色粘土混じり灰色砂質土（層厚11cm、5層）、黒灰色粘質土（層厚4cm、4層）、黄褐色粘質土に富む黄褐色土（層厚13cm、靱石の最大径7mm、3層）、灰白色砂混じり灰色土（層厚14cm、靱石の最大径8mm、2層）、作土（層厚11cm、1層）の連続が認められる（図1）。発掘調査では、これらの土層のうち、7層および6層の下位の2層から水田遺跡が検出されている。

(2) E地点

本地点では、下位より砂混じり黒褐色土（層厚8cm以上、8層）、黄灰色粘土に富む黒褐色土（層厚5cm、靱石の最大径10mm、7層）、黄灰色粘土を含む灰色砂質土（層厚8cm、6層）、白色粘土混じり灰色砂質土（層厚11cm、5層）、黄褐色粘質土（層厚6cm、4層）、褐色砂質土（層厚39cm、3層）の連続が認められる（図2）。発掘調査では、これらの土層のうち、7層の直下と6層の直下から水田遺跡が検出されている。

(3) J地点

本地点では、下位より砂混じり黒褐色土（層厚13cm以上、8層）、黄灰色粘土に富む黒褐色土（層厚6cm、靱石の最大径11mm、7層）、灰色砂質土（層厚4cm、5層）、黄褐色粘質土（層厚5cm、靱石の最大径3mm、3層）、灰白色砂混じり灰色土（層厚15cm、靱石の最大径4mm、4層）、褐色砂質土（層厚18cm、1層）の連続が認められる（図3）。発掘調査では、これらの土層のうち、7層の直下と6層の直下から水田遺跡が検出されている。

3. テララ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

(2) 分析結果

テララ検出分析の結果、5層中からはスポンジ状により発泡

した灰色粘土（最大径10.6mm）が比較的多く検出された。靱石の表面には斜方輝石が含まれている。

また他に少量の発泡のよい白色靱石（最大径3.1mm）が認められた。重鉱物としては、斜方輝石、角閃石、單斜輝石、悪鉄鉱が含まれており、とくに斜方輝石と角閃石には火山ガラスが付着し本質と混ざっているのが認められた。

4. 考察—テララ粒子の起源と遺跡の堆積年代について

(1) B地点

本地点において、7層中に含まれる靱石は比較的多い。靱石の色、色調も合わせて考慮すると、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C靱石（As-C、新井、1979）に由来すると考えられる。そして7層に多く含まれていることから、7層付近にAs-Cの降灰層があると考えられる。その上位の6層には、As-Cに由来する靱石が比較的多く認められた。他に発泡のよい白色靱石や本質の角閃石が認められたが、これらはその特徴やテララの分布などから、6世紀初頭に榛名火山で発生した榛名一歩川テララ（Hr-S、新井、1979、坂田、1986、早川、1989）に由来する可能性が大きいと思われる。したがって、このHr-Sとこの層位関係から、5層についてはHr-S降灰以降に発生した洪水または6世紀中葉に榛名火山で発生した榛名一歩川テララ（Hr-I、新井、1982、坂田、1986、早川、1989）の噴火に伴って発生した火山泥流堆積物に由来している可能性がある。

8層中に多く含まれる黄褐色粘質靱石は、層位や岩相などから1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテララ（As-B、新井、1979）に由来すると考えられる。さらに2層中に含まれる灰白色靱石は、岩相から1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A靱石（As-A、新井、1979）に由来すると考えられる。

以上の示標テララとの層位関係から、2層から検出された水田のうち、7層下の水田はAs-Cの上位にあると考えられる。また6層下の水田は、Hr-Sの上位で少なくともAs-Bの上位にあると考えられる。

(2) E地点

この地点において7層に多く含まれる靱石は、その特徴からAs-Cに由来すると考えられる。またB地点でのテララ検出分析の結果を合わせて考えると、5層の灰色粘質土にHr-Sの噴火あるいはHr-Iの噴火に伴って発生した洪水堆積物に由来する可能性があると思われる。以上のテララとの関係から、2層から検出された水田のうち、下位の3層はAs-Cの上位にあると考えられる。また上位の水田は、Hr-Sの上位で少なくともAs-Bの上位にあると考えられる。

(3) J地点

この地点で、7層に多く含まれる靱石も、その特徴からAs-Cに由来すると考えられる。またB地点でのテララ検出分析の結果を合わせて考えると、5層は層位や岩相などからHr-Sの噴火あるいはHr-Iの噴火に伴って発生した洪水堆積物

写真図版

I 遺跡遺構写真



1、CF水田跡 南から



3、FA下水田跡 北から



5、FA水田中央



7、FA水田跡



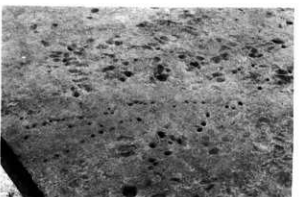
2、CF水田跡 西から



4、FA下水田跡 北東から



6、FA下水田跡 北西から



8、動物の足跡

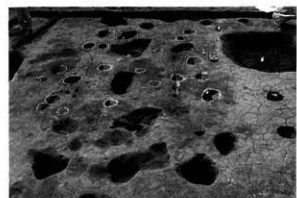
II 遺跡遺構写真



9、CF水田跡 西から



11、CF水田跡 西から



13、CF水田跡 西から



15、中世～近世耕作痕



10、土壌3K 1



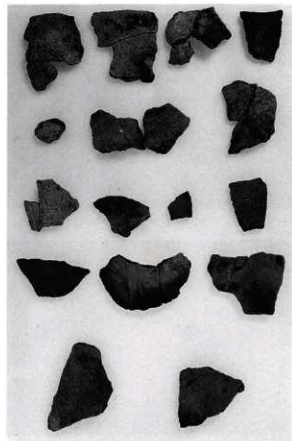
12、1区3K 2



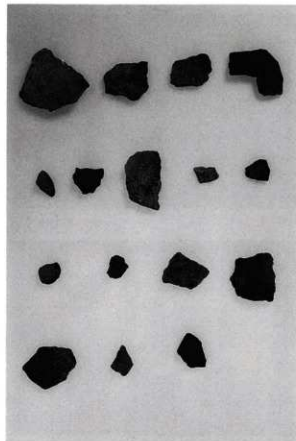
14、CF水田跡



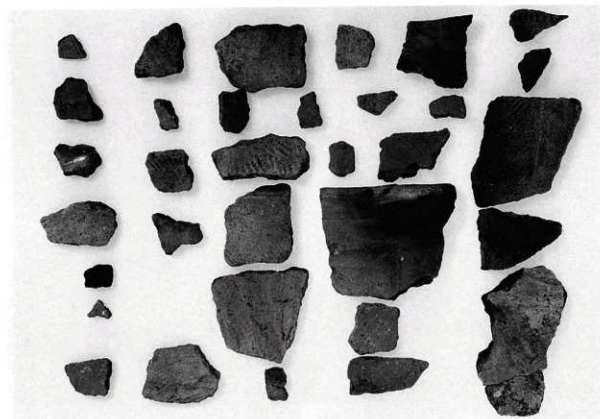
16、A、日蝕石処理溝



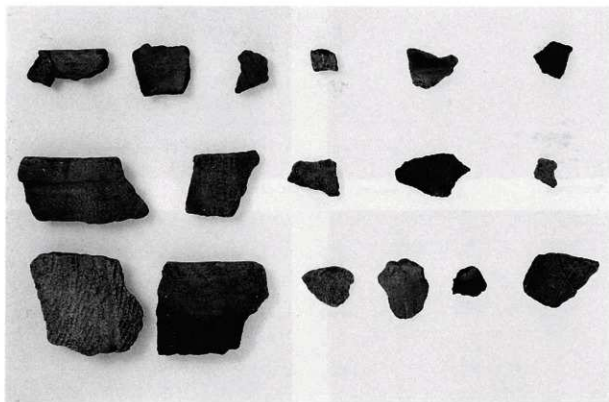
P. 7 1~16



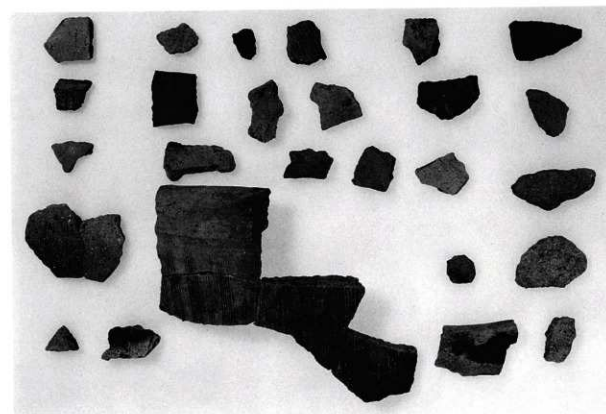
P. 7 17~32



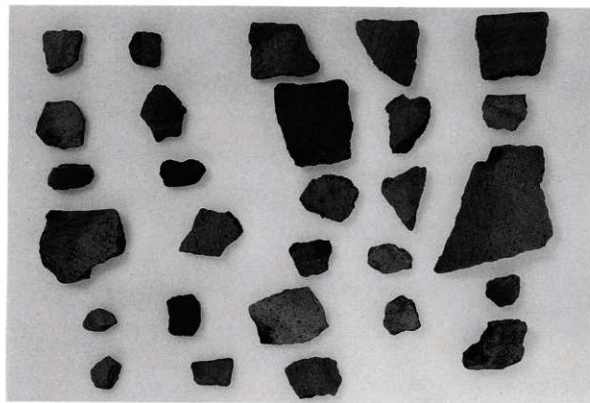
P. 9 16~50



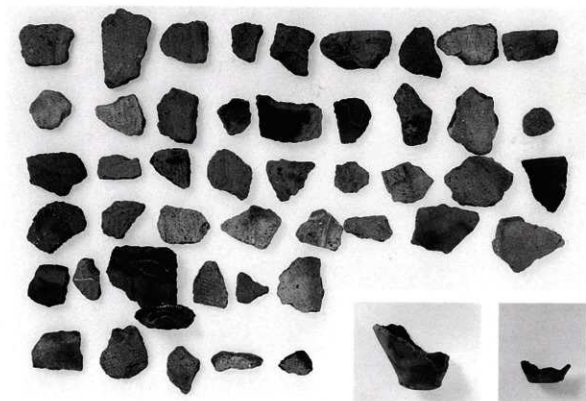
P. 8 1~17



P. 9 51~76



P. 10 1~28



P. 11 29~74



P. 11 №75



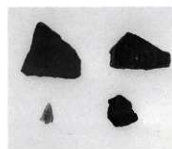
P. 11 №37



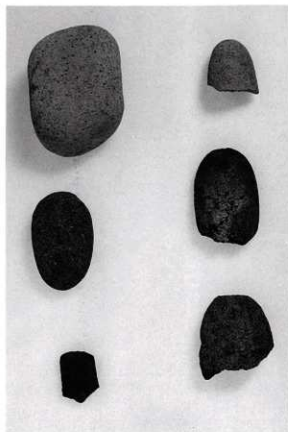
P. 12 №1~3



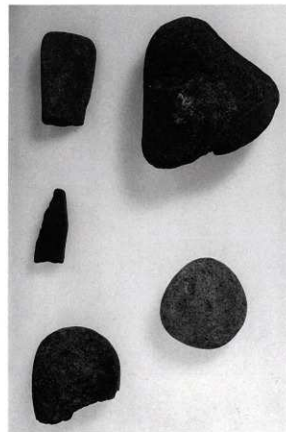
P. 13 №1, 2, 4, 13



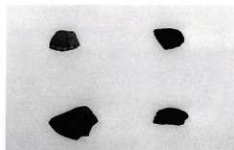
P. 15 №1~4



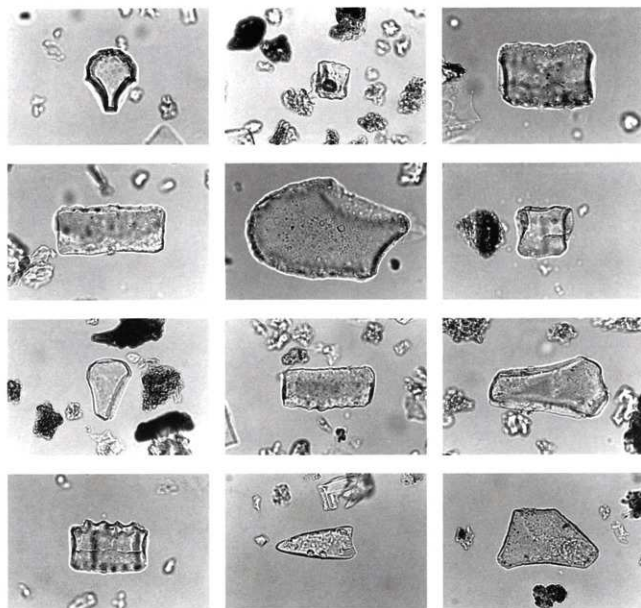
P. 23 №1~6



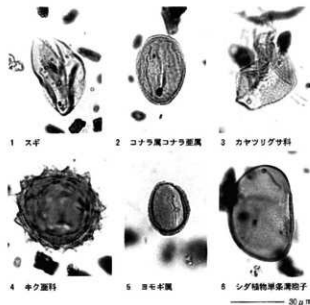
P. 23 №12~16



P. 23 №7, 9, 10, 11



植物花粉体の顕微鏡写真（倍率400倍）



発掘調査参加者は次の通りである。

新井 五郎・新井 義見・金井 智治・小池 勝美
小池 亨・青木 敦子・石井 誠男・岩崎富士世
植原 武治・岸 雄二・小嶋 明子・高橋多市郎
宮下 公男・砂賀 守一・吉田 信雄・高見沢貞二
須田 忠久・湯浅 綾子・長野 定一・反井富八郎
長野 弥生・古田 稔・松本 茂・田島いつ江
金山 武一・後閑 栄・渡辺 陽子・根岸シナ子
金井 正徳・津金寿美子・小田切美幸
田村 初江（整理）・中村キヌエ（整理）
中村 貢（整理）

発掘調査報告書抄録

ふりがな	カミコバナムラヒガシ イチ・ニ
書 名	上小埜村東Ⅰ・Ⅱ遺跡
副 書 名	上小埜村地盤建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査
巻 次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第147集
編 集 者 名	神 戸 肇
編 集 機 関	高崎市教育委員会
所 在 地	〒370 群馬県高崎市高松町1番地
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな	カミコバナムラヒガシ イチ・ニ
所在遺跡名	上小埜村東Ⅰ・Ⅱ遺跡
ふりがな	グンマケン タカサキシ カミコバナ
所 在 地	群馬県高崎市上小埜825番地

コ ー ド	北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調査原因
市 町 村	遺跡番号				
102020	255	362113	19940930～19941104	977.1㎡	住宅団地建設
	294		19960801～19961121	4192.4㎡	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
上小埜村東Ⅰ・Ⅱ	生 産 生 産	縄 文 弥 生 古 墳 中世～近世	土坑、土壇、溝 水田跡、畦、溝 水田跡、畦、水口、耕作痕、溝 堀立柱建物跡、耕作痕、溝	縄文土器、石器 石鏃、土器 土器、磁器

高崎市文化財調査報告書第147集

上小埜村東Ⅰ・Ⅱ遺跡

編 集 高崎市教育委員会
文化財保護課埋蔵文化財係
発 行 高崎市教育委員会
印 刷 荒瀬印刷株式会社
平成9年3月 印刷発行

